

アメリカの児童書に見る祈りの力

村上真理*

The Power of Prayers Found in an American Children's Book

MURAKAMI Mari

Abstract: Ruby Bridges became a pioneer in school integration at the age of six. She was chosen to spend her first-grade in what had formerly been an all-white elementary school. As the first black child to attend the school, she faces protesters with anger, hatred and prejudice. This paper discusses the source of her courage and dignity in such circumstances, focusing on her prayers.

Key Words: power of prayers, American children's book, The Gospel According to Luke

1. はじめに

今の時代は他人を誹謗し攻撃することに麻痺しているのか、多くの罪のない人々がそしられて苦しみにあっている。差別を受けて阻害されたり、蔑まされていじめられたりすれば、その人の生きる力は失われ、人生に希望が持たなくなってしまうであろう。人の心を打ちのめすこういった行為は放置すれば社会を蝕むものになる。このような社会の風潮を変えていかなければ悲しい出来事はなくなる。

そして社会が変わることを望むのであれば、恐れにも打ち勝つ勇気を一人一人が持つことや互いにそれを持つ支援をすることも必要ではないだろうか。これまでの歴史の中で逆境に果敢に立ち向かっていった人々の姿は数多く伝えられているが、そのような逞しさの源は何であったのだろうか。

本稿のタイトルは「アメリカの児童文学に見る祈りの力」であり、これを描写する作品としてピューリッツァー賞作家のロバート・コウルズによる『ルビー・ブリッジズものがたり』を取り上げている。

ルビー・ブリッジズは白人専用の小学校に通うことになった黒人少女であるが、日本でも数社の高校英語検定教科書でも扱われ、高校生にも知られる人物である。

1990年代のアメリカ児童文学には「人種統合」を扱う作品が見られ、この『ルビー・ブリッジズものがたり』も広く読み継がれている。

本稿は罵られてもくじけずに苦難を乗り越えようとす

る主人公の祈りに注目し、そこから生まれる、人が持ち得る力強さや勇気について考えるものとなっている。

2. 作品の概要

ルビーはミシシッピ州のタイラータウンで生まれた、非常に貧しい家庭に育った少女である。父親は穀物を収穫する仕事をしていたが、地主が穀物の収穫を機械化したために職を失い、1957年、ルビーが4歳の時に家族はルイジアナ州のニューオーリンズに引っ越すことになる。そこで父親は用務員の職を得て、母親も清掃業のパートに出て家計を助けている。

このルビーの住むルイジアナ州を含むアメリカ合衆国深南部の州では人種隔離法によって、レストラン、バス、トイレ等多くの公共施設が黒人、白人用に分けられていた時代がある。小学校も例外ではなく、黒人と白人は同じ教育を受けることはできず、黒人と白人の子供は別々の学校に通っていた。そして1960年の末に連邦最高裁判所がこの隔離法を違憲とした。まさにそんなとき、ルイジアナ州ニューオーリンズの白人専用ウィリアム・フランツ小学校に、当時6歳の黒人少女ルビー・ブリッジズ1名を受け入れる命令が下された。この人種統合に反対する白人児童の親たちは学校ボイコット運動を始め、この学校に通うのはルビー1人になる。ルビーには、毎朝プラカードを掲げ大口を開けて罵りの言葉を自分に浴びせる白人男女の間を、私服の連邦裁判所の執行官に守られながら、指示にしたがって立ち止まらず前だけを見て登校しなければならない日々になる。ある日、教室か

* 教養科 Division of Liberal Arts

らルビーの登校の様子を見守る教師 †1 が暴徒の前にルビーが立ち止まって何かを云っているところを見る。そして何を云っていたのか問いただしたところ、実は彼女は登校途中に自分を罵る彼らのために祈りをささげていたが、その日はそれを忘れてしまったために群衆の中で祈りを捧げたというのである。両手を組み合わせて天を仰ぎ祈るルビーのその祈りは

Please God, try to forgive those people. Because even if they say those bad things, they don't know what they are doing. So you could forgive them. Just like you did those folks a long time ago, when they said terrible things about you. (神様お願いします。あの人たちをお許してください。あの人たちはいけないことを言っている自分たちが何をしているのか知らないからです。ですから赦してください。ずっと前にあの人たちがあなたについてひどいことを云ったとき、あなたがあの人たちをお赦しになったように)[1]

という、『ルカによる福音書』†2 の 23 章 34 節にある、十字架につけられたときにイエスが云った言葉を含むものであった。

3. ルビー・ブリッジズの信仰の背景

苦痛に耐える日々の中で、群衆のために欠かさず神に祈るルビーの信仰はどのように形成されていったのであろう。

ルビーの母親は教育熱心であり信仰心が深い。そして子供たちにも幼いころから神に信頼して生活することを望んでいる。このことは『ルビー・ブリッジズものがたり』の中で次のように書かれている。

Every Sunday, the family went to church.
 “We wanted our children to be near God's spirit,”
 Ruby's mother said. “We wanted them to start feeling close to Him from the very start.” (毎週日曜日は家族で教会に行っていた。ルビーの母親はこう言っていた。「私たちの子供たちが神の聖霊とともにいますよう、神を近くに感じ始めますように」)[2]
 またルビーが全国黒人向上協会(NAACP)より白人学

校に転学することが伝えられた時もやはり家族は教会で祈っている。その姿が次のように描かれている。

Ruby's parents were proud that their daughter had been chosen to take part in an important event in American history. They went to church. “We sat there and prayed to God,” Ruby's mother said, “that we'd all be strong and we'd have courage and we'd get through any trouble; and Ruby would be a good girl and she'd hold her head up high and be a credit to her own people and a credit to all the American people. We prayed long and we prayed hard.” (ルビーの両親は娘がアメリカの歴史上、重要な出来事に参加すること選ばれたことを誇りに思いました。家族で教会に行ったときのことを、母親は次のように言います。「私たちは教会で神に祈りました。私たちみんなが心を強くし、そして勇気と励ましをもってあらゆる苦難を乗り越えられることができますように。そしてルビーが立派な少女となり胸を張って顔をあげて毅然として振る舞い、私たち黒人とすべてのアメリカ人の誉れとなりますようにと、長い間ひたすらに祈りました」)[3]

この 2 つのエピソードから、家族にはこの世は神中心のものであって、すべてのことは神の計画にあり意味を持つものであることを心に留め、その時その時の状況の中に神の知恵と導きを求めていることが感じ取れる。

4. ルビー・ブリッジズの信仰心

教育熱心な母親の元、ルビーは気丈に学校に通うのであるが、強いストレスが心身の健康に影響を及ぼしはじめる。とくに学校での昼食を一人きりの教室で取る事は大きなストレスとなり、食欲も失われていく。このことは自伝的作品『Through My Eyes』に次のようにある。

Another problem that year was lunchtime at school. I often ate in the classroom by myself while Mrs. Henry took her lunch break with the other teachers. It was a lonely time. The marshals sat outside while I opened up my lunch box. As time went on, I couldn't eat. [...] I began hiding my uneaten sandwiches in a storage cabinet in the classroom. I poured my carton of milk into the big jar of paste we had in the room. [...] At home there was a period of time when I had trouble eating too. All I wanted were potato chips and sodas. My

†1. ヘンリー先生。ルビーの授業を任された北部出身の白人女性教師。

†2. キリスト教の聖典『新約聖書』の巻頭に収められた四つの福音書のひとつ。他の 3 つは『マタイによる福音書』、『マルコによる福音書』、『ヨハネによる福音書』である。

parents told Dr. Coles † 3 about it, and he tried to talk to me. Then he remembered the woman in the crowd outside school each morning who said she was going to poison me. Dr. Coles thought I was afraid the woman really would do it.(学校での昼食時間はまた苦痛だった。ヘンリー先生が先生方と昼食を取る間は一人で昼食を取ることもあり、とても寂しい時間だった[4]。登下校に付き添う執行官がお弁当箱を開いている間も教室の外にいた。次第に食事が取れなくなっていった。(中略)手を付けなかったサンドイッチを教室のごみ収納庫に隠すようになった。牛乳は教室にあった糊を入れる大きな瓶に注ぎ入れた。(中略)家でも異常な食行動をとることがあった。食べたいものと言えばポテトチップスと炭酸飲料だけだった。両親がコウルズ先生にこの状況を伝えると先生は私との対話を試みるのだった。先生は毎朝学校の外で罵る集団の女性が毒殺すと言っていたことを思い出し、本当にされてしまうかもしれないと私がおびえていると考えていた)[5]

そして眠れない日々が続くようになる。そのような状態にあってもルビーは祈りを捧げている。その姿は次のように書かれている。

I would do as she said, and then I would sleep. Somehow it always worked. Kneeling at the side of my bed and talking to the Lord made everything okay. My mother and our pastor always said you have to pray for your enemies and people who do you wrong, and that's what I did. (母の言う通りに眠るようにしていました。お祈りはどういうわけかいつも効果がありました。ベッドの横に跪いて神にお祈りをすれば、すべてはうまくいくのでした。いつも母と牧師様は、人は敵やその人に良くない行いをする人のために祈らなくてはならないと言っていました。だから私はそのように祈っていました)[6]

† 3. 『ルビー・ブリッジズものがたり』の著者。コロンビア大学の医学部を卒業してハーバード大学の付属病院で研修し、空軍に所属する白人の小児精神科医。執行官に囲まれて通学するルビーを偶然目にして、このような過酷な状況にどうやって耐えることができるのかと関心を持ち、全国黒人向上協会にルビーの援助を申し出て、ルビーと家族を支えている。(Bridges, 1999, 46 頁)

こういった心身がむしばまれる状況にあっても、ただ嘆き悲しむのではなく、平安は神の導きにより与えられるという教えに従って祈るのである。それは自分が癒されたいという願望や、恐れや不安から逃れる道を求めるものではなく、苦しい状況下にあっても人を赦す力を求めるものであり、赦すことで相手や状況が変えられていくことを望む祈りである。ここに神に自身の行方を委ねていることが感じられる。

5. ルビーの祈りの中心にあるもの

2 節で『ルカによる福音書』に書かれたイエスの言葉に触れた。そして前節にある「人は敵やその人に良くない行いをする人のために祈らなくてはならない」とする教えもまた『ルカによる福音書』の 6 章 27、28 節にある「あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。あなたを呪う者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい」という個所に見ることができる。

『ルカによる福音書』は「イエスによる救いは民族や階級の差を超える」を主題とし、神が、人生の苦難に翻弄される人間一人一人に、どんなに深い憐みを抱いているかを、人間が経験する痛みを体験し、理解したイエスの生涯を通して語りかけている。そして神の恵みに与った人々の賛美と喜びが特徴的である。

また「女性の福音書」とも呼ばれるように、当時、社会的地位の低かった女性に神が特別な地位を与えている様子が読み取れる。これらからルビーに寄り添った牧師はルビーに主にこの福音書を用いて、御言葉を信じて耐え忍ぶ姿勢と心の平安や望みの成就のためにひたすら祈ることの大切さを伝えていたのではないかと想像される。

さらには、ルカが医師であることも心身がむしばまれていく状況にあってはルビーを引き付けたのかもしれない。

このような想像からこの福音書を見ていくと、11 章 9 節からは「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求めるものは受け、探すものは見つけ出し、たたく者には開かれます」との主の祈りの教えに頁が割かれていることから「祈り」の大切さを説いていることに気づく。さらに 12 章 4 節には「体を殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません† 4」とあり、5 節で「恐れな

† 4. この「恐れる」という言葉であるが日本語で「おそれる」と言った場合には、「恐ろしい」という意味の「恐

ればならない方をあなた方に教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい」と続いている†5。「この方」とは神のことであり、神を恐れることによって地獄に投げ込まれるような恐怖からさえも解放され、すべてのものについて恐れる必要はなくなる、すなわち本当に恐れるべき神を恐れ敬うならば、その時恐れていることも恐れる必要はなくなるというのである。そして恐れるとは神を信じる信仰を強く持つということである。この2つの章はルビーに「祈り」と「神への恐れ」こそが恐怖や不安から解放されるためにできることなのだと伝えたことだろう。

れる」と、もう一つ、「畏敬の念を抱く」あるいは「畏れかしこむ」の「畏れる」という字があり、ここでは「恐怖」ではなく、「畏敬の念を抱く」という意味である。

†5. イエスの弟子たちが信仰ゆえに迫害を受けて殺されるかもしれないという状況を前提としている。人間は肉体の命を奪うことはできるが、その死を越えて最終的に人間を支配して、導いているのは神であることに目を向けさせて、死んだ後というよりむしろ今生きている日々において、人間を本当に支配し、守り、導いている神に信頼して生きようという教え。

なお4、5節は1節にある、弟子たちにイエスが語った「パリサイ人*のパン種に気を付けなさい。それは彼らの偽善のことです」につながっている。「偽善」とは迫害する者たちを恐れ、殺されることを恐れて自分の信仰を隠してしまうことである。ここでの状況は人々の前でイエスに従うという信仰をはっきりと言い表して迫害に恐れず歩むのか、あるいは信仰を内面の事として群衆に紛れていくのかを弟子たちが問われているものである。また「パン種」とはそれが入ることで生地全体が発酵して膨らむものであることから、少しではあるが全体を変えていくもの、ここでは人々を間違った信仰に導くパリサイ人の教えを例えるものとして用いられている。

*パリサイ人とは律法(もとの意味は祭司あるいは預言者によって与えられる「教え」。「法」、「秩序」、「規範」の意味を含む)の形式的実行を重んずるあまり律法本来の精神を逸脱し、偽善に陥っている点でイエスと論争を戦わすユダヤ教の一派。イエスの主張を最後まで理解しようとしなかったばかりか一方的に「律法を汚すもの」と難詰してイエスを十字架に追いつめている。

そして6章では人をさばくことを戒め、人を赦すことを強調している。

この福音書だけを見てもルビーについて想像できることは、やはり状況を変えることができるのは神にほかならないと信じて聖書に書かれた神の言葉に聞き従い、そこから赦すことと忍耐の意味を知り、祈りによる救いを待ち望み、それが群衆に向かって発する言葉となってあらわれたのであろうということである。

6. 群衆の実態

ではルビーが絶えず祈った対象である、ルビーの登下校に合わせて集まって怒りを露わにする群衆、特にコウルズ医師が注視した、恐ろしい言葉を発する女性の様子はどのようなものであっただろう。

ルビーの登下校中に現れる群衆たちの様子は連日報道され、ニューオーリンズは全米で注目が集まる地となっていたという。そしてこの報道に関心を抱く人物がいた。それは作家ジョン・スタインベックであり、著書『チャーリーとの旅』に当時の様子を詳述している。

スタインベックは特に悪口雑言を浴びせるために毎日集まる頑丈な体格の中年の女性・母親の団を観たいと思っていたという。これらのある一団は「応援団」と呼ばれ、悪口雑言を名演技と呼ばれるほどに作り上げて毎日拍手喝さいを送られるまでになっている。スタインベックは群衆を追い返すために警官が学校に通じる道に築いた木のバリケードの後ろで吼え、歓声を上げて、演じあげる喜びのあまり互いに肩をたたきあう群衆を見ている[7]。

そしてそこでの女たちの叫んだ文句にスタインベックは「野卑で、汚く、墮落した言葉だった。私の長い、一人立ちの生涯で、私に悪魔的な人間のヘドを見もし、聞きもした。それならなぜ、この女たちの叫び声に慄然とし、気持ちが悪くなるほど悲しみにあふれたのだろうか」と問う中、この「応援団」の人間は「母親でなく、女性でもなかった。狂気の観衆の前に演じて見せる、狂気の芸人であった」と記している[8]。これらの供述からルビーに向かう群衆のすさまじさが感じとれる。

私たちがルビーと同様の状況にあってこのような群衆を憎まずにいられるだろうか。それ以上にルビーがしたように神に彼らの赦しを願えるだろうか。信仰による祈りとはなんと大きな愛であり、さらには苦しみに遭っては、他にない救いの道であるかに気づかされる。

またスタインベックは「応援団」を見た翌日、南部訛りの一人の男性を車に乗せている。この男性は「人間が義務を果たしているのを見るのは気持ちがいいね」、「神

様があの人たちに祝福を与えますように。だれかがあん畜生の黒ん坊を学校に寄せつけないようにしなくてはいいませんか」と言っている[9]。ルビーが、自分に悪口雑言を浴びせる集団に向かってその行為を赦そうとする祈りをささげている一方で、集団の行動に祝福を望む姿がある。ここには神の正しさ・清さを信頼せずにはいられないような感情を覚えたことだろう。

7. アメリカ人の宗教意識

さいごに、本稿の主題が祈りであることからアメリカ人の宗教帰属を概観したい。

米調査機関ハリス・インタラクティブ社の調査ではアメリカ人の95%が神の存在を信じているという[10]。そしてその「神が存在する」と信じる70%が毎日祈る。神の存在を信じない人でさえもそのうちの1割は毎日祈るという。この大多数のアメリカ人が定期的に祈るという行為には人間の祈りに神が応えるという前提がある。そして人間は創造主の前には平等であり人間を導くのは神の意志なのである[11]。

そのアメリカ人の約85%はキリスト教徒と自らを規定しているという[12]。実際アメリカ人は教会によく行く。総人口の約4割、1億人以上が毎週あるいは定期的におのおのの教会に礼拝に行く。なお、礼拝の内容は徹底的に世俗の価値観の否定であり、人間の死は肉体の滅びというだけで、魂は不滅で復活するのだという生死感でつらぬかれている。教会に行くということは人生の有限、死について、否応なく考えさせられる訓練を受けることになるし、アメリカで生きるかぎり、キリスト教の無数のイメージが意識の底に沈殿している[13]。

8. おわりに

冒頭で今を生きる私たちは、恐れにも打ち勝つ勇気を持ちたいとすることを唱えた。そしてその力の源を、逆境に負けず、固い意志と寛大な心を持ち続けるルビーの聖書との関わり、またルビーを最も引きつけた福音書は『ルカによる福音書』ではないかと想定して、そこに書かれた御言葉の中に勇気の源を見出そうとしてきた。

聖書は迫害される中で書かれたものであり、弾圧されている者の心に希望を与え、絶望の淵にある人々を立ち上げらせ、人の心に生きる勇気を創造してきた神の言葉である。

ルビーにあつては迫害から生じるストレスが心身をむしばみはじめ、食欲を失っていき、眠れない日々が続くのだが、そのような状態にあつても自分を罵る人々のために祈る姿には、絶対的な神への信頼と、祈りの力に對

する確信が感じられる。御言葉に従い、すべてを神に委ねる事で恐れに打ち勝つ勇気が与えられ、いつか変化がもたらされるという希望を感じ取ったのだろう。

人生には様々な苦しみや悲しみがあつてそれらが私たちを恐れさせる。恐れによって人間は壊れてしまうこともある。恐れの中にあつては、「大丈夫だ」と励まされたり自分にそう言い聞かせても、恐れからは解放されない。ルビーの生き方を追うなかで教えられたことは、恐れからの解放は、それから目を背けることではなく、本当に恐れるものを知ってこそもたらされるということである。そして聖書を通して神と繋がり、祈るものに与えられる賜物の大きさに思いを馳せる。

参考文献

John Steinbeck : *Travels with Charley—in search of America*, Penguin Books, (1980)

山形孝夫 : 聖書を読み解く, PHP 研究所, (2007)

山形孝夫 : 読む聖書辞典, 筑摩書房, (2015)

新日本聖書刊行会 (翻訳) : 聖書 新改訳, いのちのことば社, (1970)

前田護郎 : 新約聖書概説, 岩波書店, (2005)

引用文献

[1] *The Gospel According to Luke (The Holy Bible, New King James Version)*, 675 頁, Thomas Nelson, (1982)

この箇所は次の状況下での出来事である。ゴルゴタの丘の上に三本の十字架が立てられ、真ん中の十字架に鞭を打たれ、いばらの冠をかぶせられ、葦の棒で頭をたたき唾を吐きかけられたイエス・キリストが架けられる。イエスの足元にはローマ兵が槍を構え、睨みをきかせて立ち、周囲には群衆がひしめくように取り囲み、イエスが苦しんで死んでいく様子を固唾を飲んで見ている。何よりイエスには、太い釘を手足に打ち込まれ、そこに全体重がかかるという想像を絶する激痛と苦しみがあつた。その十字架の苦しみの中で、イエスは「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と父なる神に祈る。「彼ら」とは、人々がイエスを慕うが故、立場を脅かされまいとするがために卑劣なやり方でイエスを殺そうとするユダヤ教指導者、イエスが死に当る罪を犯していないのを知りながらも、面倒を避けてユダヤ人の言いなりになってイエスに十字架刑を命じた、死刑執行の権限をゆだねられているローマの総督ピラト、また少し前までイエスを慕っていたのに、指導者たちに扇動され

るとイエスを「十字架につける、十字架につける」と叫び続けた無責任な群衆、イエスを見捨てた弟子たちなどのすべての人を指す。

また“赦し”というのは、キリスト教における大きなテーマのひとつである。それは人間の罪が、イエスの十字架の死によってすべてゆるされたことにある。

なお聖書が教える救いは、信仰により、恵み（値なしに受ける愛なる神からの祝福）によって与えられるものである。

- [2] Robert Coles : The Story of RUBY BRIDGES,
8 頁, Scholastic Press,(1995)
- [3] 同上, 12 頁
- [4] Ruby Bridges: Through My Eyes, 48 頁, Scholastic Press,(1999)
当初は食堂で昼食を取ることが許可されていない。休憩に外に出ることも許されず、教室で一日を過ごしている。教室の外には執行官が控え、手洗いに行くにも付き添われている。(22 頁)
- [5] 同上, 48-49 頁
- [6] 同上, 48-49 頁
- [7] 大前正臣(訳):チャーリーとの旅ーアメリカを求めてー,
213 頁, 弘文堂,(1964)
- [8] 同上, 219-222 頁
- [9] 同上, 233 頁
- [10] ハロラン芙美子 : アメリカ精神の源「神のもとにあるこの国」, 7 頁, 中央公論社, (1998)
2009 年 11 月 2 日と 11 日に米調査機関ハリス・インタラクティブ社は、18 歳以上約 2 千人を対象にオンライン調査を実施している。それによれば全体の 5 人に 4 人が神の存在を信じていると答えている。
- [11] 同上, 265 頁
- [12] 同上, 12 頁
- [13] 同上, 13-14 頁